

# ジョン・ニュートン

## 不屈の生涯



え・浅妻健司



理運動の創始者・丸山敏雄は、著書『万人幸福の栞』

の中で、「事をなすの根本の力は信念である」と表現しています。「決心の強いか弱いかによって、仕事の成否がきまるが、決心ということは、今までなかった事を、こうしようと信念を定めること」と記し、決心と信念を定めることを、ほぼ同義として用いています。

決心という観点から思い起こす人物に、米国の第十六代大統領エイブラハム・リンカーン（一八〇九～一八六五）が挙げられるでしょう。氏には次のような名言があります。

「君の決心が本当に固いものなら、もうすでに希望の半分は実現している。夢を実現させるのだという強い決意こそが、何にもまして重要であることを決して忘れてはならない」「そのことはできる、それをやる、と決断せよ。それからその方法を見つけるのだ」

これら力強い言葉に証明されるように、リンカーンは、これまで米国で誰も着手したことのない奴隷解放宣言を出しました。

さて実は、リンカーンがこの宣言を出す前に、その先鞭を付けた人がいました。有名な賛美歌「アメイジング・グレイス」の作詞者であるジョン・ニュートン（一七二五～一八〇七）です。彼はイギリスにおいて奴隷貿易廃止法の成立に尽力し、米国での宣言につながる流れを築いたのでした。

ジョン・ニュートンはもともと奴隷貿易船の船長でした。嫌がる奴隷をムチで叩いて乗船させる商人として生計を立てていました。

ある時、その船が嵐に遭遇して難破しかけたものの、一命を取り留めました。その後、努力を重ねて英国国教会の聖職者になります。

ジョンは小さな村の司祭として村人に奉仕する日常を送りました。一軒一軒の信者たちの悩みを聞き、適切な助言をするなどして、教会は活況を呈します。

その頃、ジョンは内なる声に導かれるように、真の奉仕とは「今、就いている職業を通し、これまで経験したことを生かすこと」と悟ります。そこから、奴隷の悲哀を

知る商人と聖職者の両方を経験した己のみが果たすことのできる奴隷解放運動に、残りの人生を捧げようという決心に到ったのです。

しかし、奴隷制廃止に向けて国会に提出した法案に対し、国民の無関心は甚だしく、一顧だにされませんでした。奴隷を前提とした当時の社会秩序を破壊するという理由からでした。

そのような中でも国会議員一人ひとりを訪ね歩き、請願運動を続けるジョンに応援者が現われます。一人の国会議員が同志として働くようになり、妻のメアリーも陰で夫を支え続けました。

一八〇七年、ついに奴隷貿易廃止法が成立します。その年の暮れ、ジョンは八十二年の生涯を閉じました。二十八年に及ぶ活動は、失明するなどの苦難の連続でしたが、国を動かすことに到ったのです。

信念とは、苦難を乗り越えることによつてますます強くなり、他者へ尽くすことによりよ固まるものなのかもしれません。

\*参考文献『アメイジング・グレイス 魂の夜明け』神渡良平著・廣済堂出版